

検討会議（R5. 5. 29）後に意見等記入票で寄せられた意見

1 これからの本県高等学校教育に求めることについての意見

■検討会議委員①

- 超少子高齢化の現代において、一般的な教育改革ではもはや対応できないと思う。
 - 文部科学省の講演では、他県で行われている全国からの生徒募集や特徴ある取組の紹介があったが、本県の実態を見ても、即効果が出るものではなく、今後衰退していくことも考えられる。
 - 現に他県では、必要十分な生徒を確保できている学校・学科がある一方で県外入学者ゼロの学校・学科もあり、一概には言えないが、そこに魅力の有無という違いもあるのではないかと考える。他県の多くの事例があるため、情報収集し、本県独自の視点で分析をすることも必要だと考える。
 - 私立高校も生き残りをかけて学科やコースの再編、特徴ある教育課程の編成、中学生の募集や卒業後の進路選択につながる企業等への売り込みのためのPRなど経営努力している。
 - 15歳で頼る人がいない場所へ、また親元を離れてまでも、青森の高校・学科に入学したいと思わせる、真に魅力のある学校・学科、また高校教育を目指すべき時にきていると思う。
 - 高校卒業後県外に出てしまう人が多すぎるのも課題なのではないか。

 - 魅力ある大学や上級学校、就職先がなければ、人口は急激に減り、負のサイクルに陥ることは自明の理である。また、高校生だけでなく、若い親世代がUターンIターンしたいと思わせる環境づくりも大事である。その点からも企業や学校誘致はもちろん、先進的な農業基盤づくり、観光業の推進、そして青森の魅力発信とそれに見合う人財の育成（本県出身を自慢できる人づくり）など、総合的な改革が必要だと考える。
- (1) 連携協同した持続可能な教育改革
- ・ 産学官民が一体となった学校運営
 - ・ 企業や自治体とのコラボレーション
 - ・ 中学校や大学との連携
 - ・ 地域との連携、交流
- (2) 真に魅力ある高校教育
- ・ 高校の意識改革（横並びや鍋蓋型序列の考え方の撤廃）
 - ・ 国内外短期留学支援制度
 - ・ 専門的教育が受けられる学科の設置（サテライト学習の推進）
 - ・ 多種多様な資格や検定取得を支援する体制づくり
 - ・ 高校独自のスクールミッションの作成
 - ・ 進路指導（キャリア教育）の充実
 - ・ 生涯学習を踏まえたスポーツ・文化活動の推進
 - ・ 少人数の学級編制や大学並みの単位制時間割
 - ・ 入試改革も同時に進めていく必要性

(3) P R

- ・ 県の重点施策としての位置付け
- ・ 県や単位高校レベルでの周知やP Rの在り方
- ・ 県内保護者や生徒からのアンケート聴取

■検討会議委員②

- 現在中学校では学年進行で35人学級編制となるため、高等学校においても35人学級編制を視野に入れて検討してもよいのではないかと考える。教員の負担が軽減され、生徒と向き合う時間の確保につながるものと思う。

■東青地区部会委員①

- ある程度の学校規模を維持（1学年が2クラス以上、できれば6クラス以上）をすることを基本としてはどうか。
- 生徒は、人と関わる活動の中で成長していく。学校行事、部活動等の教育活動による教育効果を上げるためには、ある程度の生徒数、教員数が不可欠であると考えられる。また、教育活動においては生徒同士のトラブルが生じることもあるが、それを乗り越えるように支援するのも大事な教育である。しかし、1学年に1クラスしかなければクラス替えもできずに、結果的に転校、退学につながるケースがある。地域の実情もあるため一律にはいかないと思うが、学校規模の維持を基本に据えてはどうか。
- 全国からの生徒募集を拡充してはどうか。本県においては、様々なことに考慮しなければならないこともあろうかとは思いますが、他県に発信できるものをもっている学校は積極的に全国募集を行うべきだと考える。それが刺激となって、県内の学校間での切磋琢磨につなげていければ、本県の教育の魅力、レベルの向上につながるものと考えられる。

■西北地区部会委員①

- 人口減少が加速度的に進む中、今後の本県の推定人口を踏まえると、更なる高校教育改革が必要であることは強く認識しているが、単純に高校を閉校してしまうことは、子育て世代、若い世代が各地域から流出してしまい、地域の衰退は明らかである。
- できるだけ、各地域で高校教育を継続するための一つの手段として、例えば、かつての本校、分校に似たような形式で、本校に附属する「サテライト教室」を開設し、本校の授業をオンラインで学習できるような仕組みづくりを検討してみてはどうか。現在、G I G Aスクール構想によりタブレット端末等I C Tの活用が飛躍的に向上しており、オンライン授業と、ひと月に数回、本校で行う授業をハイブリットで履修することにより、単位を取得できる仕組みを検討してみてはどうか。
- 高校の教育活動の形態、入試、法的な部分で実施可能かなど総合的な検討が必要だが、人口減少は日本全体の問題でもあることから、法改正等が必要となるのであれば、国に働きかけることも必要ではないかと考える。

- 会議の名称にある「魅力づくり」は、中学生の立場から見た「魅力」であると思うため、中学生や保護者等からも随時、意見、意向等を調査し、確認したほうがよい。

■西北地区部会委員②

- 設置者が違うため難しいかも知れないが、私立高校の今後の在り方や見通しを考えずに県立高校だけの改革で大丈夫なのか。

■西北地区部会委員③

- 「『何を教えるか』ではなく、『生徒にどんな力がついたのか』」や、「子どもは保護者や地域、教師を選べない」という言葉から、だからこそ真剣に教員が学校全体で子どもたちを支援しながら、子どもたちの将来のために、青森県のために今こそ取り組んでいかなければならないと強く感じた。
- 地区内の高校数が減少してきたが、その状況でも学校として、地域や保護者とできることを可能な範囲で連携しながら、地域を盛り上げ、必要なときは地区の学校総出での地域貢献や、地域人材等を活用しながら、あおもり創造学からキャリア教育に繋げ、子どもたちにはたくさんの大人と関わり合い、様々な経験をさせるなどの「一人一人の夢や志の実現に向けた取組」が急務だと感じている。
- 子どもたちの学校での教育活動をイメージしながら、他県の事例のように深め、現実のものになればよいと考えている。
- 本検討会議で、多面的な視点からの御意見を伺いながら、本県の「子どもたちのため」という思いを軸に取り組んでいきたい。

■西北地区部会委員④

- 地区内から県立高校が無くなる可能性があり、人口減少が進む中で致し方ない現実であるが、最寄りの高校が無くなると通学に困る子どももいる。
- 人口減少という世の中の流れに抗おうとすると、莫大な経費と労力を要するため、「ゼロ高等学院」のようなリモート学習や通信制の形態を県立高校へ導入することができないか。
- 必要な時だけ登校し、学習指導要領に沿った教育が身につけているかを見極めるための卒業検定も必要となるものと思う。

■中南地区部会委員①

- 本検討会議は、県立高校の魅力について考えるよい機会、スタートラインであると受け止めている。「魅力」とは何か。将来構想の観点からどのような「魅力」を創造できるのかを検討する機会であることを願っている。
- 令和10年度以降の県立高校の魅力をつくるということは、現在、小学校低学年・中学年の児童にとって魅力的な学びの場を創造するということである。
- 若手教員が委員に入っていない（もしくは少数）のはなぜか。委員の多くが管理職もしくは元教員（管理職）であることに疑問を持った。

- 将来構想の観点から、令和10年度以降の県立高校において当事者として教育する立場の人（若手教員）が委員として検討することが望ましいと考える。
- 学校の立場から見た「地域」とは何か。学校の立場から見た「地域」、地域において教育的な活動を行っている団体による取組をどのように捉えられているのだろうか。
- 学校と地域の連携について、地域団体により実施されている教育活動の現状を知ることにも必要ではないか。
- 人口減少が進み、地域から学校がなくなることに不安を抱く地域では、生徒の教育ということについてどのように捉えているのだろうかと常々考えている。
- そこで、教育における規模と質を担保するために、県内の地域校コンソーシアムを組むことから検討できないか（コンソーシアムを大規模化するのではなく、まず、小さく実践することで教育の質の担保を目指す）。
- 私は地域において児童、生徒と接する機会が多く、近年、とても驚き、これから大前提として抑える必要があると感じていることの 하나가、ユニセックス化である。トランスジェンダー、LGBTQとは別に、小学生やそれ以下の子どもがユニセックス化している。
- これまでの「規格」に当てはめることは難しくなることが推測されるので、これまでの常識にとらわれず、教育の質を高める「魅力」について検討が必要である。
- 第一回魅力づくり検討会議は、県立高校の「将来構想」の検討であることを念頭に意見交換すべき。

■上北地区部会委員①

- 5年一貫教育を行う高等学校の増加。これまでは、ヴァルター・クリスタラーの中心地理論が適用される高校や大学の配置により、居住する自治体から留学せざるを得ないケースが多かったが、遠隔教育や単位制学習が充実すれば、県内でも高等教育が受けられるようになることが期待される。
- 黒石高校や八戸高専のように、より専門的な教育が受けられる5年生の高等教育機関（高校）が増えれば、県外流出が急減するだろう。進学を希望する生徒は、高校5年時に大学3年生に編入することができる。高校の学費は大学に比べて格段に安いいため、大学院への進学も経済的に楽になる。
- 双方向学習の実践。今日、グローバル化の中で日本の相対的な競争力が低下し、『失われた30年』が40年目を迎えようとしている。今、最も必要とされているのは、『主体的・対話的で深い学び』の実践である。小・中・高の子を持つ親として授業参観すると、まだまだ講義形式が主流で、教師が一方的に学習内容を伝えているのが現状である。魅力ある高校に必要なのは、生徒に興味を喚起するような質問をしたり、生徒の自発的な質問に答えたりしながら、先生が授業をリードしていく双方向型の学習スタイルである。特に高校では、生徒が率直に、生き生きと発言する機会を増してほしい。

- 発言内容を要約した議事録の作成。先日の会議では、発表者が事前に準備したものを読み上げていたが、どの発言にも響くキーワードがあった。よりレベルの高い成果物を作るために、発言の要点をまとめた議事録を読み返しながら検討を進めることで、非常に実りある検討会議になると思う。
- 参加型の検討会の実施。実質的な検討にはブレインストーミングが欠かせない。本検討会議では、1960年代にシェリー・アーンスタインが提唱した『市民参加の梯子』を高次元で実現することを願う。その結果、さらに魅力ある高校、ひいては高校卒業後に県内で働きたいと思うような活気ある産業が生まれることを期待する。
- 多角的視点を持つ若手リーダー・専門家の参加。参加者の多くは経験豊富な方々ですが、グローバル化が進む中で、多角的視点を持つ若手リーダーや専門家の参加は不可欠である。ハード工業代表取締役の山形虎雄氏、AGAIN代表の竹中恵理氏や、県国際交流員のチェン・エミリ氏のような日本語が堪能で異なる視点を持つ方々が参加は、今後青森県の高校づくりに必要な最適解を見つけることにつながると考える。

■上北地区部会委員②

- 私達の住む青森の将来は、日本の将来、そして世界の将来へとつながっている。
- 以前、自治体主催の国際交流の一環でニュージーランドへ視察に行き、漁業・農業・酪農・学校等を見学、その他の学校では、自治会が運営し、スロープやエレベーターを設置しなければ建設許可が下りず、また、外にあるプールは、自治会地区の住民が自由に使用できるなど、地域に開かれた場所であった。校内には演劇（自己表現）教室もしっかり備えられ、小さな舞台もあったりと、新しい発見があった。演劇活動をしていた個人として自己表現の場が必要と感じていたため、大変感激した。
- 道徳等の学びも大切だが、「自分が好きになる」自己肯定感を育成する場の増加も期待している。
- 高校生活における様々な学びをとおして、生きる力を備え、自分で考えて行動できる人財が育まれていくことを願っている。

■上北地区部会委員③

- 大きな視点で検討していくとともに、まず、現状の中学生の実態を踏まえると、普通科等は40人学級編制を35人学級編制に、職業学科等は35人学級編制を30人学級編制にすることも大切だと感じている。
- 中学校では、今年度から第2学年に「あおもりっ子育みプラン」が拡充され、少人数学級編制によりきめ細かな指導ができて一方、第3学年は適用されていないため難しい状況である。
- 現在の中学校2年生が高校1年生になる令和7年度から高校において少人数学級編制が実現されれば、多様な生徒への対応の充実が図られ、魅力化につながると考える。

■上北地区部会委員④

- 中学校卒業生数と県立高校との関係だけでなく、私立高校、他県への進学者数のデータを示していただいた上で検討が必要。

■下北南地区部会委員①

- 地域愛を育む教育が必要であると思う。
- あらゆる事例を参考に地域団体等とのタイアップが必要だと思う。
- 社会が常に求めるものは、即戦力の育成であると思う。
- 青森県や地域が今どのような人材を求めているのかをあらゆる方面からの意見を吸い上げて、地域に特化した人財育成をベースとした学科や学校の設置を進めていければ良いのではないかと。
- 各団体からの選出で選ばれた委員が揃っており、それぞれの団体で意見を共有していただくためにもPDFでの資料配布をお願いしたい。

■下北地区部会委員②

- 若者の県外流出に歯止めがかからない状況であり、県外からの若者を受け入れていくという視点で、全ての県立学校で全国からの生徒募集を導入してはどうか。
 - ・ 募集の際のPR材料は、各校のグランドデザインをベースに、各校の強みを打ち出したもの、あるいは地域社会と連携してアピールできるものを盛り込む。
 - ・ 全ての県立学校の総合的な探究の時間を「あおもり創造学」にし、青森県全体として県立学校の独自性を出していく。
 - ・ それぞれの学校とその地域の魅力が反映された形で、必要があれば新しい教育課程や学校設定科目を設定し、特色ある学校づくりを行う。
 - ・ 全国からの生徒募集を導入して成功している学校、うまくいってない学校への視察訪問を積極的に行い、青森県全体、そして地域に生かせる戦略を策定する。
 - ・ 地域の特色を反映させるために地域住民との意見交換の場を多く設け、協議を十分に重ね、学校外部との共通理解や連携を図る。

■三八地区部会委員①

【これからの時代に求められる力に関する定義】

- 教育問題は関係者が多く、利害も複雑なために、参考資料も多すぎて、本質の議論が見えにくい。
- これまでの検証データに基づき、現在の問題・課題を明確にした中で、枝葉末節にとらわれない、根本の部分での議論が必要なのではないかと思う。
- 「これからの時代に求められる力」を明確に示し、その力をどのように生かし、地域を活性化させていくかという部分が希薄であると、どのようなプログラムや制度・組織改革をしてもぶれてしまうと考える。

【これからの時代に求められる力を県民に浸透させる活動】

- 県民、地域、政治、行政、教職員、企業、親などに「これからの時代に求められる力」とは「何か」をどう訴え浸透させるかのパワーワードを箇条書き等で設定し、多くの関係者を巻き込んだ学校教育ができる施策を打つ必要があると考える。
- これからの時代とはどういうものかという青写真やビジョンも定めにくい世の中だが暫定化し共有することも必要かと思う。
- 「夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし。故に、夢なき者に成功なし。」
- 夢のかたちを子ども達とともに暫定化し、可視化できるビジョンにしていく必要があると考える。

【小中学校との連携・進路指導】

- 確り考えて進学するためには、これからの時代に求められる力を育む高校教育のカリキュラムと人財育成のプログラムを早い段階から生徒や保護者に開示し、適正な進路指導が行われる必要があると思う。

【次世代の青森を担う人財教育（これからの時代に求められる力）の広報活動】

- 皆が一つのビジョンを創造できれば、地域一丸となった教育改革が加速すると思う。
- 学校と地域と子どもたちが自信をもって今後多くの魅力ある教育プログラムに参加するための開示と広報活動が必須であり、予算・部署を設けて推進することを考えても良いのではないかと

【これからの時代に求められる力育成のための多様性に対応した教育プログラムの充実】

- 進学のための学習とは一線を画す魅力ある学習プログラムの創出
→ 進学先の大学や専門学校と連携した教育プログラムの開発
- 自分の興味や進路に応じて選べる魅力ある学習プログラム（選択制科目の充実）
- 夢や志を育む教育プログラム（人間力開発）
- 県の未来を開拓するわくわくするプロジェクト創出
- 学生と一緒に青森県の問題課題解決に向けて研究・開発を進める事業を実施

【教育人材育成と外部講師の活用】

- この人から学びたいと思われる魅力ある教師の育成（個人の資質に頼らないフォロー）
- これからの時代に求められる力を育成するための外部講師リストの作成と活用

【芯・真ある教育改革】

- プログラムを多様にし、充実させながらも表面にとらわれない高校教育を進める必要がある。
- 「これからの時代に求められる力」が確実に育成される「芯や真」のある教育改革を望む。
- 教条主義やこれまでの経緯、慣習にとらわれないためにも、課題を明確にし、この部分を改革せねばならないという課題意識・危機意識を分科会と地区部会が共有することが大事だと考える。
- 多くの課題があるからこそ、課題をシンプルに明確にすることが大事だと思う。
- 是非、分科会・事務局はデータを踏まえた検証により将来の課題を予見し、検討会議委員全体と共有を図ってほしい。
- 変わらなければ衰退する、変化の激しい時代であるため、枝葉末節にとらわれない、根本的な改革になることを望んでいる。

■三八地区部会委員②

- 縮小していく社会の中で、末端に生活する人々が不便を被る状態となっている。
- 国家として、そこに適切な支援をしなければ、全国の辺境地域で、荒廃した光景が広がっていくと思う。
- 限られた財政の中でより良い学びを確保するためには、ある程度以上の規模の学校へと集約する必要があるのはその通りだが、根本には一次産業の衰退による人口の流出や、結婚出来ない後継者の状況等、田舎暮らしにまつわるネガティブな問題がある。
- 県立高校の魅力づくりについては、私立高校に比べて特色を出しにくいのではないかと思う。
- 一部のいわゆる「進学校」を除けば「入りたい高校」ではなく「入れる高校」に受検しているのが現状である。私学助成が手厚くなったことにより、公私の別なく選択しやすくなり、これまでに比べて通学の利便性や部活動の充実度などで高校が選ばれるようになった。
- 私立高校以上に多様な体験を提供するためには、人材の発掘登用が必要ではないか。